

シンポジウム「ヘアー・ダイとパーマ」

(2) ヘアカラーの最近の品質傾向

加藤和夫・服部芳典・大石 猛*

The Latest Qualitative Tendency of Hair Color Products

Kazuo KATO, Yoshinori HATTORI, Takeshi OISHI*

Abstract

Chemical advances of the last hundred years have lead to many type of hair color products. Modern hair color products can be divided into three categories: 1) temporary hair colorants, 2) semipermanent hair colorants, 3) permanent hair colorants. Most hair colorants that have been sold in Japan are permanent hair colorants (oxidative type). Although they are far superior to the others in terms of their performance, there still remained the risk of sensitization. The extensive research effort appears to have been concentrated on developing nonsensitizing hair colorants.

要旨

いつまでも美しくありたい、いつまでも若々しくありたいとは、洋の東西を問わず常に人々の変わらぬ願いである、ということに疑いを持つ人はいないであろう。髪を染める、髪の色を変えるということは、多々ある化粧行為の中でも、最もドラマチックにこうした願望を具現できる手段の一つとして、今日では極日常的な、そして必要不可欠の粧いごとになっていると言ってもよいであろう。

史実によれば、紀元前約3000年頃のエジプトでは、ヘナナという植物の葉を乾燥させて粉末にした染料を使って髪を染めていたことが、当時のミイラの髪を調べた結果から明らかになっている。以来、人々は自分の髪の色を明るくしたり、白毛を染めたりするために多大の努力と様々な工夫を重ねてきたことが窺われる。

今日、市場には様々な種類と色調のヘアカラーがあり、誰でも比較的手軽な操作で自分の好みに応じて自由に髪の色を変えられるようになっているが、こうした合成染料を用いたヘアカラーの歴史は1863年、ドイツ人のA. W. Hofmann がp-フェニレンジアミンを発見したのに続き、1883年（明治16年）にフランス人、P. Monnet がこれをヘアカラーに用いる特許を取得し

て商品化したのが始まりである。わが国で酸化染料によるヘアカラーが初めて発売されたのは、1905年（明治38年）で、それまでは「おはぐろ」の原理を用いたつぶり10時間はかけて染毛していたものが、2～3時間に短縮され大変な好評を博した。さらに1916年（大正5年）には、過酸化水素水を酸化剤として用いたヘアカラーが登場して、今日のヘアカラー隆盛の基礎となった。

1. ヘアカラーの種類

市場には様々なタイプの商品があるが、これらは普通使用する染料の種類や色持ちの期間によって一時毛髪着色料（テンポラリーヘアカラー）、半永久染毛剤（セミパーマメントヘアカラー）および永久染毛剤（パーマメントヘアカラー）の3つに大きく分類される（表1）。その他、整髪料の要領で毎日連続して使用しているうちに、徐々に着色してくるプログレッシブヘアカラーといわれるものもある。しかし、一般にただヘアカラーと言った場合には、この中の永久染毛剤、中でも酸化染料を用いたヘアカラーのことを指す。

2. 酸化染料を用いたヘアカラー

このヘアカラーの染毛原理は、

(1) 無色の低分子の染料中間体が、毛髪内に浸透し、